

末黒野

すぐろの

9月号 (通巻841号)



花桐

小川 玉泉

(名譽主宰)

花桐や二階の窓を開け放つ

隣人の落つるに任す豊後梅
雨の日は雨に洗はれ花柘榴
白き腹玻璃にびたりと守宮の子
雨激しくちなしの錆落とすかに
花桐や二階の窓を開け放つ
四人目の曾孫を抱きぬ梅雨の晴

公園の四囲を囲む木々は、いずれも年を経た大樹になっていて、利用者に、憩いの木蔭を提供している。その中に桐の大樹がある。集会所の二階を越える高さで、紫色の花を咲かせている。あたかも窓を明けて見て下さといわんばかり。昔は娘の嫁入りに備えて苗木を植えたとされる桐の木である。

蓮

菖蒲園城址の風ををあますなく
城址への径の起伏や山法師
林立の帆柱鳴らす青嵐
無聊なる昼の灯台花海桐

松本三千夫

海風を揉み上げてをり振れ花
黒南風や島の畑は篠囲ひ
アロハシャツ妻の買ひ物メモ胸に
嶋焼や妻と頒け合ふ缶ビール
冷奴明日は抜かるる齒に染みて
本棚に吊る掛香と守り札
散策や未央柳の金に触れ
三尺の鉢が浄土や蓮ひらき

薄暑光

黒滝志麻子

(副主宰)

睡蓮や鉄の門扉の開かれて
重なりて尖る白波青岬
浜風の音に見構へ羽抜鳥
みちのくの果の竜飛や青嵐
郭公や酒造はつねに水の音
ハードルを越ゆるたてがみ薄暑光
コックスのひと声とぶや五月晴
浜の日のくらくらまぶし麻暖簾
遠河鹿造り酒屋の水甘き
岩鼻を小舟が廻る風涼し
万緑へクレー射撃のこだませり
白日傘雲育ちゐる島の空

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

雨蛙

田中臥石

光陰や忽と人逝く麦の秋
鯉船地球自転の海を航く
青梅や二つ返事の納屋壊し
花舗に立つ背へすると日覆伸ぶ
苗育つ田へ走りだす堰の水
掬ひをり青田の隅の塵芥
田水荒れ浮き出す苗や青嵐
蛞蝓の跡は空へと檣の幹
明日旅の髭剃つてをり雨蛙
鉄塔の鶴へ暗雲走り梅雨

山女魚

森清堯

放水のアーチの勢ひ夏はじめ
一枚に八ヶ岳を映せる代田かな
新樹光能舞台より通る声
吊橋に触れむばかりや桐の花
アルプスの嶺のうすす花槐
釣り上げてまづ手測りの山女魚かな
大納屋の屋根をしのぎて花檣
湧水に椀浸しをり遠閑古
払うてはならぬ静寂や苔の花
チエンソーもて彫られし龍や滝の音



青嶺

森清信子

標高千夏鶯に目覚めけり
湖に迫る青嶺や巖深く
秀を競ふ檜山杉山遠閑古
せせらぎの日差に応へ花山葵
城址より富士の全容花うつぎ
入梅の木々にむせけり関所跡
吊橋の風呼ぶ高さ朴の花
白波の弾く朝日やヨツトの帆
覗き込む影を崩しぬあめんばう
境内に孔雀の三声著莪の花

植田明り

石黒興平

一川をまたぎ風待つ五月鯉
さながらに天使のティアアラ朴の花
展帆やロープ操る日焼顔
棟上げの槌音高き日永かな
一村を際立て植田明りかな
高原の静寂を深め閑古鳥
農協の名入り帽子や麦の秋
麦の穂の禾きらめかす夕日かな
水口の流れの清き植田かな
住み馴るる坂多き町栗の花

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



梅酒瓶 菅野日出子

一幕の天井棧敷出て薄暑
新緑やなじみの茶房満席に
夫の字の残る琥珀の梅酒瓶
一人薫くアロマキャンドル走り梅雨
母子像へささやくさまに夏落葉
灯台を洗ふ潮騒浜万年青
教会の亭午の鐘や風薫る

風薫る 加藤静江

夏めくや大正ガラス磨かれて
潮騒やとべらの花の白極め
博文邸囲む黒松風薫る
首塚の昏きを著莪の花あかり
竹落葉堰を落つるも留まるも
花かんむりの少女夏野のプリンセス
緑蔭や裾の短き修行僧

麦秋 斉藤マキ子

たたなはる山ふところの田植かな
草笛のアンデスのうた雲白く
美篤てふ友の名の里麦熟るる
麦秋や対向車なき峠越え
麦秋の小諸に刻む歩数計
ぬたくりて放生池の大鯰
夏霧や全室灯る山の宿

青炎集

松本三千夫選



横浜 太田良一

万緑を揺すり七半突き抜けぬ
万緑の隅に腰かけにぎり飯
大川や虹の根つこの吾妻橋
火をくべて星の話のキャンプかな
少年に戻るキャンプや肥後守
滴りの窟に日の矢や銭洗ふ

横浜 遠藤清子

大安の芒種の今日や夫八十路
子の蹴れるボールゴールへ風薫る
鯉のぼり風をはらみて逆立ちに
動かざる河鵜ニーチエかサルトルか
藍染の小物商ふ麻のれん
潮引ける砂地の穴や赤手蟹

横浜 岡本ヨシエ

緑さず蘆花の机上の不如帰
竹叢をもつれもつれて夏の蝶
花嫁の佇む池畔あやめ咲く
山の径散り敷くえごの花白き
海望む寺百段の濃紫陽花
武蔵野の空や並木の山法師

横浜 木村弓子

五月雨の降り止み池面鎮もれる
炊きたての露の青さを仏前に
街騒のじやがいもの花暮れなつむ
天空の藍の雫か濃紫陽花
深みどり濃みどり続く夏木立
紅の雫こぼるる薔薇の雨

横浜 坂口 郁子

庭隅の白に始まる額の花

小判草一万両の風の丘

噴水の虹を紡ぎて浜の風

道幅を狭めて白しえごの散る

高鳴りのからくり時計街薄暑

香煙の絶えぬ浅草夕薄暑

横浜 有賀 鈴乃

火の爆せて闇深めけり薪能

風ゆるする大樹背や薪能

ひとさしの舞のきらめき薪能

古民家をしきり浅黄の麻のれん

夏霧の湖涯もなく広がれり

水芭蕉の葉の茂りやう風つのもり

横浜 山口 登

苔庭の一隅染むる紫蘭かな

鎌倉や初夏の風負ふ寺詣

白牡丹虫一匹を包みこみ

霾天や墨絵めきたる妙義山

足跡の乱れ消されて磯遊び

薫風の吹き上げ来たり切通し

横浜 原 和三

赤屋根の山荘映ゆる青嶺かな

青葉闇厩舎に滲む昼灯

赤岳や麓を染むる山つつじ

薫風や人馬影おく白き馬塞

夏日逝く赤松林風渡る

田園のあぢさぬ道やささら川

横浜 鈴木 七雄

山の端を離れがたきや春の月

刈り込みの垣に点てん緋のつつじ

春愁や出しては戻す棚の本

老鶯の不意に頭上や足とめて

腹這ひてねぢ花巻くや右左

緑蔭やメタセコイアの幹高し

横浜 都留 百太郎

万緑に湯煙ひかる地獄かな

菜を刻む自炊湯治や宵涼し

らつきよの漬くるに叶ふひげ払ひ

照らしつつ青葙に伸ぶ日の光

くつきりと山見ゆる日や袋掛

青梅雨に備ふわかもと正露丸

耕 土 集

黒滝志麻子選



渡辺富士子

横浜 石田 朝子

アルプスの水のまほろば花山葵

松蟬や雨後の激流遠ひびき

川崎宿芭蕉名残の麦穂波

水引くや人気なき田の真昼時

迫りくる彫の伽藍や夏燕

梅雨最中紅をうつすら検診日
上出来と己に拍手梅ジュース

宮地 静雄

伊藤武文

青山の定家葛の花かをる

露地の辺に里の色して茄子の花

雨上り麦秋の風すがすがし

名刹の岩壁黙と岩煙草

永らへて里の音いとし時鳥

麦秋や球児の声の小学校
久女派を退かぬ同志や冷し酒

加茂川の灯いろいろうす衣

詠み難き朝焼の色天の色

一幅の夜叉女と酔ひぬ夜の雷

中村 弘

加藤 タミ

寡夫二人休む切株春の月

柿若葉子規は句にせり実と鐘と

ビンに挿す風に折られて白牡丹

万緑や一段ごとに溪の声

石揺する章魚逃げ出して藻の蔭へ

昼寝する夫のいびきや獅子のごと
波うつてかさかさかと麦の秋

水郷の町の小町や花菖蒲

風鈴の音にぎやかに吹かれけり

半夏生小舟を舫ふ池の端